

# 近現代東アラブ研究

黒木英充

- ①Albert Hourani (1968) “Ottoman Reform and the Politics of Notables,” William Polk and Richard Chambers ed., *Beginnings of Modernization in the Middle East: The Nineteenth Century*, Chicago, The University of Chicago Press.
- ②‘Abd al-Karīm Rāfiq (Abdul-Karim Rafeq) (1974) *al-‘Arab wa al-‘Uthmāniyūn 1516-1916*, (アラブとオスマン人たち 1516～1916年), Damascus, Maktaba al-Atlas.
- ③エドワード・サイード (1978; 1993) 『オリエンタリズム』(板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳) 平凡社ライブラリー。
- ④Bruce Masters (1988) *The Origins of Western Economic Dominance in the Middle East: Mercantilism and the Islamic Economy in Aleppo, 1600-1750*, New York, New York University Press.
- ⑤板垣雄三編 (2002) 『「対テロ戦争」とイスラム世界』岩波新書。  
(出版年次順に配列)

五冊をどのような基準で選ぶのか、頭の痛いところである。離島に流刑になるとして、五冊だけ携行してよいと言われたら？ 自分のこれまでの研究生活に一番強い影響を与えたのは？ 自分の専門とする分野(シリア・レバノン近代史)で最先端の優れた研究書とは？ 世界的な学界の記念碑的著作を選ぶとすれば？ いま人人に最も読んでもらいたいものを挙げるとしたら？ 結局、これらの基準を混成して選ぶことにした。

最近惜しくも他界したエドワード・サイードの③『オリエンタリズム』を知らない人はいないだろう。二〇世紀の世界における中東・イスラーム研究を振り返るならば、誰しもこの一著が波及させた震動の大きさを認めざるをえない。それは単に中東を専門とする研究者社会に対する知的衝撃に止まらず、文化に関わる学問全般に向けて、さらにはパレスチナ問題を通じて地球規模の政治的言説空間に向けて、比類なき影響を及ぼした。数世紀間にわたって無数の人々が築き上げてきた巨大な政治的・文化的構造物の、それまで隠蔽されて見えなかった内部を、たった一人の鋭利なペンを描き出したのである。本書が既成の学問の枠を越えて発信したメッセージの普遍性は、まさに二〇世紀のパレスチナとアメリカという、サイードが生きた「地域」に根ざしたものであった。一方、この本が巻き起こした激しい論争も、(バーナード・ルイスを筆頭とする) 反論者と擁護者双方の政治性

と資質をあぶり出す効果もあった。

『オリエンタリズム』のみならず、以後サイードが矢継ぎ早に出版した諸著作もまた大きな論争を呼んだ。パレスチナを中心とする中東地域とそれを取り巻く世界との関わり合いを語る場合、それは必然的にサイード自身が主体的に関与する政治的言説とならざるをえない、という事情に由来しているよう。パレスチナのみならず広く中東の人々は、彼に代弁者的・代理人的役割を見出していたように思われる。一九九四年に私が初めてレバノンを訪れたとき、ひょんなことから（ベイルートトの日本食レストランで見かけたので、つい話しかけたら翌日……）ドルーズ派の代表的政治指導者ワリード・ジュンブラートを、シユーフ山地のムフタラの城に訪問する機会をえた。彼の隣に座って大テーパー一杯に並ぶレバノン料理とフランス・ワインの昼餐にありつく僥倖に恵まれたのだが、その食事の前には客たちの間でちよつとした激論が繰り広げられた。オーストリアの前レバノン大使と、レバノン大学の歴史学教授マスウッド・ダーヘルとの間で、一九世紀のヨーロッパ諸国がこの地域において果たした役割をどう評価するかという問題について、フランス語で丁丁発止があつたのである。前大使が、激動の国際政治と武力衝突のなかでレバノンのキリスト教徒を保護した役割を認めるべきだと主張したのに対して、自身キリスト教徒（ギリシア正教）のダーヘルは、アラブ民

#### ●リーディング・ガイド

族主義者の立場から猛烈に反論した。水のごとくウォotkaを流し込みつつそのやりとりを黙って聞いていたジュンブラートは、すくつと立ち上がり、近くの書棚から一冊の本を抜き出して前大使に手渡した。「これを差し上げましょう。読んで下さい」。それはサイードの *Culture and Imperialism* 『文化と帝国主義』(New York, 1994) だった。

さて、私が専門とするシリア・レバノン地域の近代史研究において、強い持続的な影響力をもつ点で第一に指折るべきは、古典的な①の論文であろう。ほぼ四〇年前のシンポジウム発表論文であるが、今日まで当該分野の研究者はすべて、一〇年ほど前に他界したこの碩学の掌の上で仕事をしてきた、と言って過言でない。オスマン帝国時代のアラブ地域を分析する枠組のなかに、「アーヤーン」と呼ばれる名望家層を初めて的確に位置づけ、地域社会と中央政府の間の媒介者の性格を、ヨーロッパ諸国勢力と関わりをもつ自律性にも目を配りながらダイナミックに描き出したのである。アーヤーンに着目した研究はその後、アナトリアやバルカンなど他の地方社会研究においても主流となり、様々な文書資料の発掘・分析の進展により、多様化・精緻化していった。

一九一五年にマンチェスターで生まれたホウラーニーは、その名前が示す通り、現在のシリア南西部からレバノン南東部にかけてのホウラーン地方の家系の出で、イ

ギリスへのレバノン移民二世だった。兄にイスラーム研究で著名なジョージ・ホウラーニーが、弟にアラブ現代史の重要局面に多々居合わせたジャーナリストのセシル・ホウラーニーがいる。その弟が著した回想録 *Cecil Hourani (1984) An Unfinished Odyssey: Lebanon and Beyond*, London. からは、産業革命の代表的工業都市における移民家族の生活の息づかいがうかがわれる。アルバート・ホウラーニーは、二〇世紀の世界の中東研究界を代表する人物として必ずや五本の指のうちに数えられる人物であるが、その絢爛たる研究・教育人生は対談集 *Nancy Elizabeth Gallagher (1994) Approaches to the History of the Middle East: Interviews with Leading Middle East Historians*, Ithaca Press. の第一章において語られている。若き日に英国王立国際問題研究所でアーノルド・トインビーとH・A・R・ギブの下で働き、オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジの中東研究センター所長を長年にわたって務め、現代フランスの代表的アラブ史家アンドレ・レイモンをはじめ多数の研究者を育てた彼の軌跡(オックスフォードを中心にペイルートからシカゴまで広がる)は、それ自体が今後研究の対象になり得よう。この対談のなかで、ホウラーニーがサイドの『オリエンタリズム』を、ドイツのオリエンタ研究の厚い蓄積と知的誠実さを無視したものと批判している点は、ホウラーニーがあくまで

「バランスのとれた歴史家」であろうとする姿勢を示すと同時に、自らをイギリスの「オリエンタ研究」の本流に位置づける意識を示すものとして、興味深い。なお①の論文は、ホウラーニー自身の弁によれば、大学の行政に追われて学問的には不作だった一九六〇年代の仕事のなかで、例外的に成功したものだったという。本論文が *Albert Hourani (1981) The Emergence of the Modern Middle East*, London. と *Albert Hourani, Philip Khoury & Mary Wilson eds. (1993) The Modern Middle East: A Reader*, London; New York. において、繰り返し収録されていることにも、彼の思い入れが表れている。なお、ホウラーニーの最後の著書 *Cecil Hourani (1991) A History of the Arab Peoples*, Cambridge, Mass. は壮大なアラブ通史であるが、嬉しいことにこれは湯川武監訳・阿久津正幸訳(2003)『アラブの人々の歴史』第三書館、として日本語で読めるようになった。

ホウラーニーはオックスフォードの中東研究センター所長になつたばかりの一九五〇年代末から六〇年代初め頃、ロンドン大学のSOAS(オリエンタ・アフリカ研究学部)にも非常勤で中東史を教えに出かけていた。そこに集まっていたアジア・アフリカ各地からの留学生のなかに、オスマン帝国時代のアラブ史研究を志すシリア出身の三〇歳前後の研究者がいて、ホウラーニーから大

いなる学問的刺激と激励を受けていた。その留学生が②の著者アブドゥルカリム・ラーフェクである。

一九三一年にアレップ近郊の小都市イドリブに生まれたラーフェクは、青年時代をアラブ・ナシヨナリズム最盛期に過ごし、自らをギリシア正教のキリスト教徒である前にまず何よりも「アラブ」、とする立場を鮮明にしている（右掲の対談集第八章）。その研究姿勢も一貫していて、オスマン帝国時代シリア諸地域の社会における諸宗派共存の実相を、文書資料に手堅く依拠した実証性をもって多角的に論じる、というものである。ダマスクス大学の歴史学科で長年教鞭をとるとともに、ペイルトやアメリカ国内各地の大学で研究・教育に携わってきた彼は、現在、ヴァージニア州のウィリアム・アンド・メリー大学教授を務めている。七〇歳を過ぎたいまも、夏季やクリスマススの休暇でシリアに帰省すると文書館通いを欠かさない、エネルギッシュな現役バリバリの研究者である。そのラーフェクが四〇歳代初めに刊行した②は、アラブの歴史家が初めて、オスマン帝国支配下のアラブ地域全体に目を配りつつ、その時代を単なる暗黒時代としてではなく、中央政府と地方社会の相互関係がダイナミックに変容した時代として描き出した、総合的通史である。時代的制約から、依拠した資料がもっぱらアラビア語年代記・写本等と英仏の外交文書資料であったものの、その視野の雄大さと後進に与えた影響力からす

れば、記念碑的な一冊であると言つてよい。実際、本書はアラブ諸国の大学で歴史学教科書として使われた。

その後ラーフェクの仕事は、整備が進んだオスマン期イスラーム法廷文書の分析をもとにした社会的実証研究へと展開した。ダマスクスやパレスチナのガザを中心に、都市における職能組合など社会的諸勢力の実相を復元したり、都市・農村関係を論じたり、といったモノグラフを陸続と発表してきた。ダマスクスの歴史資料センターで何度も同じ大机で並んで仕事をする機会があったが、法廷記録台帳の頁を嬉々として猛烈なスピードで繰ってゆく様子は、えもいわれぬ迫力があつた。外国人若手研究者に対しては概して親切で面倒見がよく、私もダマスクスのお宅に幾度か呼んで頂いたり、お茶の水女子大学の三浦徹教授と一緒に学会のついでにヴァージニアの大学に招待して頂いたり、またイスタンブルのグラランド・バザールでは彼の遠縁に当たるアンテリオキア出身の金細工商の店を探すのにお供したり、という楽しい思い出がある。論文を読んで頂いてアドバイスを受けたことも一度ならずある。ラーフェクと日本の中東研究との関係については、佐藤次高編（2003）『イスラーム地域研究の可能性』東京大学出版会、所収のA・ラーフェク「イスラーム地域研究についての回顧と展望」を参照されたい。

さて、このラーフェクに対する献辞が記されているの

#### ●リーディング・ガイド

が、ブルース・マスターズによる④である。マスターズもかつて、ダマスクスの資料館でラーフェクと並んで文書に向かつて以来、親交をもっている。この研究書の意義は大きく二点ある。一つは、中東の伝統的イスラーム経済システムはなぜヨーロッパの重商主義的経済システムと競合して敗れたのかという、誰しも考えるけれども、しかし実証的に解を導くのが極めて困難な問題に対し、誠実に取り組んで一定の結論に到達した点である。ムスリム商人の多くがヨーロッパ諸国との交易自体を重視しなかつたこと（より有利な立場にあるキリスト教徒商人に任せておけばよいという考え方）、およびイスラーム経済倫理に内在する個人主義的イデオロギーとヨーロッパ重商主義思想との相克、を指摘したのである。この結論自体、いまや何ら新奇なものではないが、文書資料に依拠してデータをもとに事実関係を積み上げる仕事は、膨大な時間と忍耐、そして何よりも鋭い分析能力を要する。いま一つの意義は、国際商業都市アレppoの社会経済史的側面を、アラビア語法廷記録、オスマン語文書資料（ヨーロッパ側外交・商業文書は言うに及ばず）を用いて、初めて鮮明に描き出した点にある。本書をもって、オスマン期シリアの歴史研究は新しい段階に進んだと言える。マスターズはウォーラーステイン学派に属するがゆえに、歴史事象を「近代世界システム」論の枠内にきれいに収めようとする。この点に私は反発を覚えることも

#### リーディング・ガイド●

あるが、古色蒼然としたアラビア語・オスマン語文書が語るミクロの事実関係をあのマクロ理論に繋いでゆく見事な技には、脱帽せざるをえない。

同じアレppoの都市史を研究対象として修士論文を書いた翌年に、本書を手にした。そのとき以来、マスターズの仕事は常に私の目標になっている。さらにその翌年、一九八九年末に長期滞在としては初めてシリアに出かけた。その最初の頃、ダマスクスの歴史資料センターでラーフェクに紹介されて初めてマスターズに会った。一月ほどの彼の滞在期間中、昼過ぎまでの開館時間の後、毎日のように街のなかの食堂で昼食を共にしたが、そこでのおしゃべりは貴重な機会だった。その後最初に書いた英語論文を彼が別の著書で引用してくれたのは嬉しいことだった。遙か先を行く彼にどれほど迫れるか、日暮れて道遠しの感であるが。

だんだん私的な話ばかりになってきたが、「私の選んだ五冊」だから許されるだろう。そのついでに⑤は手前味噌。二〇〇一年九月一日事件の後、日本国内で奔流のごとく様々な言説が飛び交うなかで、中東研究者としてどうしても物を言わずにはいられない、という思いが強まっていった。恩師を編者とし、研究仲間たちと一緒に作った本書を、刊行後二年経った現在読み返してみても、随所に示された示唆的な論点は、色褪せるどころか、いよいよ重みを増しているように見える。ますます多く

の人々に読んでもらいたいと願う内容のものである。

シリアやトルコの歴史文書館での仕事に専念したいのだが、地域研究者は現在の問題に直接関わらざるをえない宿命を負っている。この本作りに関わってみて、二〇〇年前のアラビア語・オスマン語文書の世界と、ポスト九・一一の世界とは実は密接に繋がっているのだ、と再認識した次第である。

（くろきひでみつ／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

●リーディング・ガイド